

科学的現象学の方法論について

伊 賀 光 屋

本稿は、心理学や看護学の領域で、現象学的方法論として多くの論文に採用されている A.Giorgi の科学的現象学とそれを方法のレベルで詳述している R.H.Hycner や C.Holroyd の現象学的分析の指針が、彼等が依拠したと言っている E.Husserl の本質学あるいは形相的諸学の考え方に叶っているのか否かを論じるものである。第一節では A.Giorgi の現象学のとらえ方について述べ、第二節では彼の標榜する科学的現象学（記述現象学）と還元の可能性について異なる立場にある解釈学（解釈的現象学）とを対比し、第三節では A.Giorgi の科学的現象学の方法論について述べ、第四節では科学的現象学が記述現象学であり得るのかについて述べ、第五節では R.H.Hycner や C.Holroyd の「現象学的分析の指針」の方法的手順について触れ、第六章では彼等の方法論や方法が、Husserl の本質学や形相学の考え方に叶っていないことを明らかにする。そして、その原因が事実学あるいは経験的科学的扱い参与者（話者、被験者）の主観的データが既に彼等の自然的態度で色づけされたものであって、そこから彼等の前提や先入観を現象学的還元によって括弧入れし、さらに想像的変更の方法で本質（形相）に達することが不可能なためであることを論じる。筆者の考えでは、おそらく、経験的科学的可能な解釈パラダイムは解釈学（的現象学）かシンボリック・インタラクショニズムでないかと思われる。

I 自然科学科学と現象学のアプローチの違い

A.Giorgi (1970, 1976) は自然科学的アプローチを適用した心理学と現象学（人間科学）のアプローチを適用した心理学との違いを、次のように要約している。

自然科学的アプローチは次のような特徴があるとされる。（翻訳書；116～117頁）

- ① 経験的であり、行動研究への出発点は統制された観察を通して行われている。
- ② 実証的で、法則定立的である。
- ③ 還元主義的で現象をその操作的定義に置き換える。
- ④ 定量的であって、現象を関数的に表現する。
- ⑤ 決定論的で、すべての現象の原因が求められ、原因が再現されれば現象も再現されると考える。
- ⑥ 確信的である。
- ⑦ 精密である。
- ⑧ 予測的である。
- ⑨ 分析的であり、現象をその本質的諸要素に分解する。
- ⑩ 現象は反復可能であると考えられる。
- ⑪ 観察者は独立していて、現象に影響しないと考える。

これに対して、現象学の特徴は次のように纏められている（翻訳書；52～59頁，120～122頁）

- ① 前提のない記述；現前の現象に対して開かれた態度を採り、現れてくるものを無前提的なやり方で記述する。記述には日常の素朴な言語を用い、現象を意識に提示されるままに記述するだけで説明を加えたり再構成したりしない。

- ② 現象学的還元 (括弧入れ) ; 研究者自らが予め抱いている前提や先入観と、それが現れてくる文脈を出来るだけ明確にする。
- ③ 生活世界における意味の追究 ; 事実を通して明らかになってくる、現象の生きられた意味を把握しようとする。意味は偏見のない言語的記述と、直観による本質の把握によって可能となる。
- ④ 質的次元の考察 ; 人間は世界における客体ではなく、経験しつつある人間であり、人間にとっての意味は質的であると考えらる。
- ⑤ 分析ではなく明示 (explication) ; 現象は常にある地平・文脈の中で現れるから、その意味を理解するには、その所在を地平の中で明確にし主題化する必要がある。このような現象と地平との関係の開示が明示である。
- ⑥ 本質の探究 ; 現象の本質とは、状況 (文脈) の違いによって、同じ現象でも変化する部分と不変の部分があるが、不変の部分こそが本質である。だから、自然科学のように再現性による検証は行われず、形相的還元と自由な想像的変更の手続きによって不変の側面を探究する。
- ⑦ 参与観察者 ; 独立の観察者ではなく、日常生活世界に共に居る観察者が研究を行う。

II 記述現象学 (descriptive phenomenology) と解釈的現象学 (interpretive phenomenology)

H. Spiegelberg (1982) が言うように現象学は現象学者の数だけあるといえる。M. Dowling (2007) は、実証主義に近い E. Husserl (1931), ポスト実証主義的な M. Merleau-Ponty (1945), 解釈学的な M. Heidegger (1962), そして構成主義的な H. G. Gadamer (1975) などの立場があるといっている。しかし、こうした哲学的な現象学は大まかに言って、記述現象学的なフッサールと解釈的現象学的なハイデッガーやガダマーとに大別できよう。これらのヨーロッパの哲学的伝統に対して、クロッティ (M. Crotty, 1996) が新しい現象学と呼び、シルヴァーマン (H. Silverman, 1987) が北米的現象学と呼び、ジョルジ (A. Giorgi, 2000a) が科学的現象学と呼んだ人間科学へ現象学的態度を適用した方法がある。この科学的現象学の中で、フッサールの影響を受けて記述現象学の立場を堅持しようとしているのが、Duquensne 学派の A. Giorgi, P. E. Colazzi, A. van Kaam らである。またハイデッガーの影響を受けて解釈的現象学の立場を採るのが P. Benner (1994) である。そして M. van Manen (1990) はその中間に位置すると言われる (M. Dowling, 2007)。

A. Giorgi (1992) は、人間科学における主流派の実証主義に対して、その代替戦略としての解釈的科学 (interpretive science) と記述科学 (descriptive science) があるが、これらは別個の態度であるとしている。記述とは言語を用いて、直観あるいは現前的証拠という制約の中で、経験の志向対象を明確にすることであり、記述的態度とは自己を呈示するものをそれが呈示するままに、何も加えずまた何も差し引かずに正確に記述することであるとした。正確さ (precision) とは一義性 (univocity) を意味するのではなく、それ自身を現前させるものは何であれ、それが現前させる仕方にしたがって記述しようということを言っているのである。一方、解釈とはある現象を解説するために、意味を帰属させる尤もらしいが不確実な議論を展開することであるとした。解釈を行う動機は通常は疑問とか無知とか不確実さがある状況である。このように記述は必然性を主張しているが、解釈は不確実な尤もらしさを主張しているに過ぎないとする。

解釈的科学者は日常経験のあらゆるバリエーションに気づき、その多様性を強調したいがために、その豊かさを記述に置き換えることに乗り気でない。一方、記述的科学者もそのバリエーションに気づいているが、その配列を解説するのに役立つ、そこに暗示されているアイデンティティの意味とそれらのバリエーションとの関係を明らかにしたいと思っているというのだ。記述的科学者は多様性を解説する手段として同一化された意味を、それが自己を呈示するままに引き出し、正確に記述できると信じているというのだ。ここでは本質的構造、すなわち「同一の意味の多様性」 (variations of an identical meaning) あるいは「単一化された多様性」 (unified variations) が追求される。

さて、ジョルジによれば、記述的理論家に対して解釈的理論家達がなす反論には次の五つがあるという。それに対するジョルジの回答も併せて示しておく。

- ① 意味は一義的でなく、独自のものなので、ある経験の意味を記述すると言うことは出来ないという反

論がある。文脈やその複雑性のために、一義的な意味は発見しがたく、それゆえに、様々な意味へと変換し、それらの中から尤もありそうな意味を採用すべきだといわれる。この反論に対して記述的学者なら、これらのすべての意味はその曖昧さ、多義性そのまま記述しようと答えるという。

- ② 解釈は必ずデータを超えていくという反論がある。データを超えて進んだり、データ内のギャップを説明したり、経験的には与えられない総体を明らかにしたいならば、解釈が必要になってくるといわれる。これに対して、記述的学者ならば、データを超えて進む必要はなく、データをその不完全なまま、あるいは矛盾したままに記述すべきだと答えるという。
- ③ 無意識で行われることについては解釈が必要であるという反論がある。無意識の動機付けは透明性を欠くので、それを説明するには解釈が必要だといわれる。これに対して記述的学者ならば、無意識を措定する代わりに、動機付けを確定し、その状況を記述すべきだといわれる。無意識で解釈できる様な状況ならば、何らかの特殊な特徴を持っているからその特徴を記述すればいいというのだ。
- ④ 人間は自己解釈的な存在であるから、解釈は必然的であるという反論がある。これに対して、記述的学者は、その自己解釈やその他のものに対する解釈を記述することが課題だと答えるという。人々は記述的リアリティとして解釈を生き、解釈によって不可避のリアリティを捨てようと試みる。このように人々の生活の中では解釈と記述が入り交じっている。記述的学者はそれを総体として記述するというのだ。
- ⑤ すべての意味は定義上解釈であるという反論がある。あらゆる意味の特定は解釈であるか、それと同じことになり、記述は解釈の一形態に過ぎないという。これに対して、記述的学者は解釈には恣意性の除去が欠如していて、記述には恣意的でない証拠、すなわち明証性があると主張する。

このように、記述とはテキスト内的な意味の特定であるのに対して、解釈はテキスト外的な意味の特定であるとされる。すなわち、ある対象者がある状況の中で述べ示したこと、あるいは記述したテキストの中のある言葉やある動作の意味は、その状況の中で述べ示したこと、あるいはそのテキストの中で記されていることだけから、特定されなければならない。もし、その人物の別の状況での動作や、別の時に記述したテキスト内の同様な言葉に照らして、意味を特定すればそれはテキスト外的な意味の特定、すなわち解釈になる。さらに、同時代、同一文化集団内の別の人物の言ったことややったことに照らして意味を特定すれば、その意味の尤もらしさは更にあやふやになっていくだろう、というのだ。

記述現象学と解釈的現象学との最大の相違点は、研究者の前理解や先入観を現象学的還元によって徹底的に排除しようとする記述現象学の立場と、研究者の先入観の排除は不可能でまた現象の理解には不可欠であるとする解釈的現象学の立場との違いにあると言える。実証主義に於いても実在論的で客観主義的な素朴実在論と事実の理論負荷性を強調するハンソンらの立場があるように、事実は客観的であったり外在的であることはなく発見されるものであるとする現象学においても、先入観を免れた純粹意識による現象の本質把握が可能であるとするフッサールの立場と解釈に先入観は不可欠であるとするハイデッガーやガダマーの立場がある。要するに特定の視点をもてば事実や現象はゆがんで捉えられると考えるのか、それともそうした特定の視点がなければ事実や現象は捉えることすら出来ないと考えるのかの違いである。

F. Maggs-Rapport (2000) は記述現象学の特徴として、次の点をあげた。

- ① 主体としての我々が客体（もの）を知る仕方を探求する。
- ② 意識の対象が、我々から分離した存在をもたないことを認める。
- ③ 客観的現象に焦点をあてる。
- ④ 括弧入れによって外部世界のすべての信念を保留する。
- ⑤ 自由な想像的変更を用いて現象学的還元を行う。
- ⑥ 意識に現前する通りに正確に現象を発見する。
- ⑦ 本質を探究する。
- ⑧ 「本質的结合」を明らかにするように現象学的記述を行う。

また、解釈的現象学の特徴としては次の点を挙げた。

- ① 世界内の自らの実在を通して世界を理解する。
- ② 現象を理解し解釈する。

- ③ 我々の回りで起こっているすべてのものに開かれ、また分離することの出来ない「世界一内一存在」を捉えようとする。
- ④ 「世界一内一存在」を会話と言語によって捉えようとする。
- ⑤ 解釈学的試みに個人的先入観を編入する。
- ⑥ 我々の歴史的な理解を認めて地平を融合する。
- ⑦ 解釈学的循環を通して地平を融合する。

一番の違いを一言で言えば、記述現象学では現れたもの（自己を意識に現前させるもの）は何であれ、それが自己呈示するままに正確に記述する。すなわち一つの全体としての現象を直感的に把握し記述する。ここではデータを超越する作業は一切行われぬ。それに対して、解釈的現象学は現象の意味を解釈しようとする。そのためにデータを超越してディエゲシスが行われる。

III 科学的現象学の方法

記述現象学の哲学的方法論は A.Giorgi (1997) によれば

- ① 現象学的還元という態度をとりながら、
- ② 記述を用いて
- ③ ある文脈にとっての不変の意味（本質構造）を明らかにする

ことだとされる。こうした記述現象学の哲学的方法論を基にして、科学的現象学はどのような修正を加えて人間科学に適用されるのか。

A.Giorgi (1985) (以下では Sketch 論文と表記する) は心理学の分野での現象学の方法が次の四つの段階の手続きからなると言っている。

第一段階：記述全体を読んでその趣旨（概略の意味）を捉える。 数回読み直して趣旨を捉えるが、その意味を検討したり、疑問視したりしない。

第二段階：学問的視点から、探究している現象に焦点を当てて、意味の単位を識別する。

- ① テキスト全体を同時に分析することは不可能なので、処理しうる単位に分割する。分割の仕方は、対象者にとって状況の意味が変化したと思われるところで区切る。具体的には話が転換されたり、意味が推移したと思われるところまでが一つの意味単位とされる。[これはディスコース（談話）分析のいう結束性（coherence）のあるテキスト部分のことである。また形式的には句、節、文などの統語法の構成単位（語りではポーズによる中断）で示される他に、反復生起、平行表現、パラフレーズ、代用形（代名詞、代修飾語、代補語など）、時制、相、接続表現などを用いて一纏まりのテキスト部分であることが分かるようになっている。]
- ② この際に、対象者の言葉はまだ変換されずそのまま用い、テキストが意味単位に分割されるだけである。
- ③ しかし、意味単位の分割に際して学問的態度を採用して、テキストに向かい、話者の複雑なリアリティの中から特定の一側面のみをテーマ化する姿勢で臨むとされる。なぜならば、意味単位というのはテキストの中に既にあるのではなく、学問的態度によって読み取られるものだからだと言っている。この際の態度は「限定的な非確定性」(circumscribed indeterminateness) であるといわれる。これは
 - i) 学問的関心に関連（レリヴァンス）がある事実のみに着目する。しかし、
 - ii) 前提や一般的前理解が排他的に関連があるカテゴリーを決めるのではなく、特殊な事実や頻発するカテゴリーについても真の発見がなされるように、未決性、変更可能性を保持しておくことである。
- ④ 意味単位はギュルヴィッチのいう構成素（constituents）であって要素（elements）ではない（A.Gurwitsch 1957）。つまり、意味が文脈依存的な仕方決定されているテキスト部分である。
- ⑤ この分析は内容分析ではない。古典的な内容分析はコミュニケーションの顕在的内容を客観的に、体系的に、そして量的に記述するための研究技法とされる（Berelson 1952）が、科学的現象学の方法は、

静態的・機械的に当てはめられる技法ではなく研究態度としての方法であり、また量的な分析をおもに行おうとするものでなく、深層的な意味を追求する。

この③と④からジョルジの方法は解釈学で言うところの作者の内面に迫ろうとするロマン派と読者によるテキストの生産・発見としての解釈を強調する読者中心論の折衷バージョンのように思われる

第三段階：究明しようとしている現象を浮き上がらせるように、話者の日常語による表現を学術語に変換する。

変換は内省 (reflection) と想像的変更 (imaginative variation) によって行う。テキスト外的に決められた基準にしたがって選ばれる抽象化や形式化をとらずに、テキスト内の具体的表現を隈無く調べて、一般のカテゴリーへと到達することを目指す。学問的なレリヴァンスからみて日常表現Aは学術語Bに想像的に変更すると学問的リアリティをもつならば、そうしたBを発見するのがこの段階での作業であるとされる。

第四段階：変換された意味単位を現象の本質構造についての一貫した陳述へと総合する。

単一の話者について第一段階から第三段階までに行ったテキスト分析を複数の話者についても行う。それぞれの単一の話者について得られた「特殊な状況づけられた本質構造」同士を比較し、それらに想像的変更を施して、複数の話者について得られる「一般的な本質構造」を捉える。

「状況づけられた構造の特殊な記述は、具体的な対象者や特殊な状況により忠実なままであるが、その状況づけられた構造の一般的記述は可能な限りその細かな点から離れて、その状況の最も一般的な意味を伝えようと試みる。」
(pp.20)

このように単一の話者の記述を基にした分析ではその話者に特殊な「状況づけられた」本質しか捉えられないが、複数の話者の記述を比較し、想像的変更を加えることで「一般的な」本質が捉えられるというのだ。A.Giorgi (1997) (以下では Procedure 論文と表記する) ではいくつかの変更点が見られる。

第一段階：データの収集。これは A.Giorgi (1985) では省かれていた段階である。データの収集は観察者による記述やインタビューによる聞き取りによって得られ、その際の質問はなるべく大まかに行いつつ自由回答方式をとって、話者が自分の見解を幅広く表明できるようにしなければならないとされる。要するに、話者が経験したとおりに、起こったことを可能な限り忠実に、経験や行為を具体的に詳述して貰うことが肝心である。

第二段階：データの読み。現象学的アプローチは意味を全体論的に捉えることを目指している。だからまず、すべてのデータを読み通して、データの包括的意味 (global sense) を読み取らなければならない。この包括的な意味はテキストの各部分がどのように構成されているかを決定するために重要である。

第三段階：データの各部分への分割。意味単位への分割は学問的視点による意味の識別に基づいて行われる。意味単位は「記述の中に」ひとりで存在するものではなく、それは研究者の態度や活動によって構成されるものだという。操作的に言えば、記述をゆっくりと読み直し、研究者が記述の中で意味が推移していくのを体験したら、その場所に印を付け、別の意味単位が識別されるまで読み続けることで関連性のある意味の単位が構成される。ただし、この段階では対象者自身の日常語による表現がそのまま残される。この段階で研究者は特定の態度 (specified attitude) を採らない。現象学的アプローチは「発見一志向」ので、データの中に意味を発見するために、予期せぬ意味を浮上させるに十分なほどに開かれた態度をとる必要がある。言い換えると専門的敏感さと自発性を働かせて関連性のある (レリヴァンス) のある意味を直観的に捉える必要がある。

表1. Giorgi と Hycner の記述現象学の手順の比較

Giorgi (1985)	Giorgi (1997)	Hycner (1985)
	①言語データの収集	①インタビューテープの書写 ②括弧入れと現象学的還元
①記述全体の読み (概略的意味)	②データの読み (包括的意味の発見)	③全体の読み取り
②意味単位の識別 a 一貫性・結束性による識別 b 表現は原文のまま c 学問的関心に関連のある単位のみ残す。	③データの分割 a 学問的視点による分割 b 表現は話者の言葉	④概略的意味単位の記入 (話者の意味の一貫性が認められるテキスト断片) ⑤研究上の間に関連した意味単位の記入 (レリヴァンスのある単位=テーマのみ抜粋) ⑥, ⑤の第三者による妥当性検証 ⑦冗長性の除去
①日常語の学術語への変換。内省と自由な想像的変更。	④生のデータの学術語への変換 (編集)。自由な想像的変更。	⑧意味単位のクラスタリング ⑨テーマの決定 (群化せられた意味単元にラベリング)。諸テーマの類似性・包括度からそれらをヒエラルキー的体系へと分類・整理する。(上位テーマと下位テーマ) ⑩個々のトランスクリプトをテーマを用いて要約する。 ⑪話者による点検と再インタビュー ⑫テーマの修正と要約。
④変換された意味単位を現象の本質構造についての一貫した陳述へと総合する。 a 一般的本質構造 b 特殊な状況づけられた本質構造	⑤データの総合と要約 生きられた体験の本質構造の記述	⑬一般的テーマと特異テーマの識別 ⑭テーマの文脈化。テーマを話者の生きられた経験に戻して表現する。 ⑮合成的要約

第四段階：生のデータを学問的言語へと変換し表現する段階。意味の諸単位が構成されれば、次にそれらを検討し、徹底的に調べ、記述し直して、それぞれの意味単位の学問的意味を明示しなければならない。ここで、自由な想像的変更 (free imaginative variation) の方法をとって学問的観点に立って各意味単位の本質を直観する。

第五段階：現象構造の表現。各意味単位が学問的視点に基づいて本質化 (essentialization) されれば、次に同じようなプロセスを変換された意味単位に対して行って研究している現象にとって何が本質で何が特殊なのかを明らかにする。すなわち、自由な想像的変更の助けを借りて学問的視点から具体的に生きられた経験の本質構造が明らかにされる。この際に一人の話者の記述から単一の本質構造を探り出すが、複数の話者の記述からはその話者の数と同じかまたは少ない数の「一般的な」本質構造が導き出せる可能性もある。ただし、多くの話者から無理矢理単一の本質構造を探り出すべきではない。

Sketch 論文 (1985) と Procedure 論文 (1997) との違いを見ると、表 1 のように、まず Procedure 論文ではデータ収集の段階が付け加えられている。しかしこれは Sketch 論文で省略されているだけで、方法論上の相違ではない。方法論上の相違点としては、まず Sketch 論文の第二段階、Procedure 論文の第三段階に置かれた意味単位への分割の手続きの所に見られる。Sketch 論文では意味単位の分割に際して「限定的な非確定性」という態度をとるとされ、学問的関心に基づき開放的な態度を採ると言っている。それに対して、Procedure 論文では特定の態度は採らないと言っている。ただし、ここでも学問的視点を探りながら予期せぬ意味を浮上させるに十分なほど開かれた態度を採る必要があると言っているので内容上の違いがあるとは考えられない。次に、Sketch 論文の第四段階、Procedure 論文の第五段階は本質構造の追究のところで、Sketch 論文では複数の話者の記述の「特殊に状況づけられた本質構造」が明らかになれば、それらからすべての話者に共通する「一般的な本質構造」を自由な想像的変更によって明らかにするとされているが、Procedure 論文では一般的な本質構造が常に求めうるものではないとして、個々の話者の経験が状況に特殊であって、記述現象学の方法を採ることでは必ずしも一般性に到達し得ないことを認めているかのようである。先に述べた A. Giorgi の挙げるフッサール主義の記述現象学の特徴の③ある文脈にとっての不変の意味 (本質構造) を明らかにする、に照らせば Procedure 論文で展開された科学的現象学の方法の方が哲学的現象学の基本的態度に叶っているといえよう。

科学的現象学では視点の移動が行われているのでそれについて述べておこう。

- ① データ収集段階では話者の視点での経験の記述を実行していることになる。
- ② データの読みの段階でも話者の視点が採用されている。
- ③ データの意味単位への分割の段階では分割に関しては研究者の視点が入るが、意味内容については話者の視点が採用し続けられている。
- ④ データの学問的視点による編集と表現の段階では研究者の視点による読みかえと記述が行われる。
- ⑤ データの総合と要約の段階では研究者の視点が採用されている。

また、記号論的な解釈の考え方から言うとデータの読みとデータの意味単位への分割の各段階が解読 (decoding)、データの学問的視点による編集と表現の段階が記号化 (encoding) にあたる。

IV 現象学的還元と形相的還元：科学的現象学は記述現象学か？

(1) 現象学的還元

フッサール主義の現象学の方法の特徴の現象学的還元という態度の採用とはどういうことか。

まず、現象とはなにか。現象とは意識に自己を呈示するものである。ものは実在である場合もそうでない場合もあるが、現前すなわち意識の前に自己を呈示する点では共通している。意識が直観的に捉えた、追加も削除もなしに呈示されたままのものが現象である。

次に、意識とは何か。意識とは単一人に属する生きられた経験の総体である。意識の主な特徴は、我々にもものを呈示することだ。この呈示の働きが直観である。そして意識は常に一つのものに向けられた何物か

への意識である。これを意識の志向性 (intentionality) という。

そして、現象学とは何か。現象学とは直観の分析、すなわち呈示される能与 (givenness) の点から、また経験する主体にとってその現象が持つ意味の点から、その現象を分析し、現象の本質構造を捉える学問である。

さて、現象学的還元とは、先入観や前提などのものに対する予備知識や感情を括弧に入れて留保し、目の当たりにしている当の現象を見ることだ。そして現在与えられているものが、その具体的状況の中で十分に自己を呈示する機会が与えられるように、それと結びつく過去の知識を脇に置いて、その現象の見方に影響を及ぼさないようにすることである。その場合、先入観や前提には、日常生活の中であるものをそのまま疑わない自然的態度も特定の学問的態度や歴史的な先行者達から受け継いだ物の考え方ですべて含まれる。

さて、哲学的な現象学では哲学者が自己の先入観や前提を括弧に入れれば現象学的還元は完了するので、こうした現象学的還元を徹底的に行うことが可能かどうかを除いて、さしたる問題は起こらない。しかし、人間科学では話者、被験者、調査対象者などの経験の記述されたデータに対して研究者が分析を加えることになる。すると研究者が自分の先入観や前提を括弧入れすることが仮に出来たとしても、話者は自然的態度で現象を捉えているのでそれを括弧入れすることは出来ない。A. Giorgi は1998年のミネソタ大学で行われた現象学的看護研究カンファレンスで「括弧入れ」はインタビュー段階で行うのではなく、分析の段階で行うのが適切である旨の発言をしたと言われている (M. Dowling 2007)。なぜならば、インタビューでは対象者に接近することを優先すべきだからだと言うのだ。これは話者の自然的態度についてはそのまま受け入れ、その自然的態度が上塗りされた経験を話者の言葉のままにテキスト化して、そのテキストを分析する段階になって、そこから話者の自然的態度を剥ぎ取り、その現象を研究者が直観視すべきだと言っているのだと思われる。そこで、人間科学における現象学では

- ① 研究者自身の先入観や前提の括弧入れと
- ② 話者の自然的態度で捉えた現象 (話者の経験) のそのままの受容

とが行われることになる。これは ethnomethodology 的無関心と同じ態度である。

(2) 記述

次に、記述とは何か。記述とは直観的証拠に基づいて、意識の志向している対象 (もの) を言語を用いて明らかにすることだと言われる。意識が志向している対象が意識の中に現れるままに正確に言語を用いて表現することだ。この際に、意識に与えられたものだけを言語化し、そのことによって現象に内在する解説を浮かび上がらせると言うことだ。

これに対して、A. Giorgi (1997) によれば、説明とは現象の記述にその現象の背後にあったり、先行する諸要因 (非直観的実体) を付け加えることだという。同様に、構築では現象の記述に推測した契機の措定が付け加えられ、解釈では現象の記述に理論や実用的理由に基づく視点が付け加えられるという。要するに、説明や構築そして解釈では現象に外在する解説が導入されるが、記述は現象に内在する解説を浮かび上がらせる。つまり記述とは現象に語らせることである。

(3) 本質の探究

本質とはある現象がとりうる様々なバリエーションの中に見られる一貫したアイデンティティ、言い換えれば共通の不変的構成素のことである。本質の探究には自由な想像的変更の方法がとられる。すなわち、ある現象の諸側面 (部分) を想像上で変更し、それでもその現象が同一性を保ち続けるか否かを検討する方法である。こうして、一貫したアイデンティティが探られる。この自由な想像的変更は哲学的現象学で言う形相的還元 (eidetic reduction) のことである。形相的還元とはあらゆる付随的意味を括弧に入れ、その経験の不変の側面があるとしたらそれは何かを問うことだと言われる (M. van Manen 2002)。

「研究過程は普遍性と特殊性を緊張状態に置きながら和解させて『隠された』意味を内省的に探究することを含んでいる。研究者は、この経験を他の関連した諸経験から区別する独自のものは何かを問う。形相的還元では、過去を見たり、生きられた経験の特殊性を通して、生きられた意味の具体性の反対側に横たわる

イコン的普遍、本質あるいはエイドス（形相）に向かう必要がある。現象学的本質あるいはエイドス（形相）という考え方は、人間生活の人間の性格についてなんらかの不変的普遍や一般化を指すのではない。それは本質主義の誤謬を犯すことになる。

その代わりに、現象学的探究は『可能な』人間的経験にのみ関心があり、時代、文化、ジェンダー、あるいはその他の環境に関わりなく、すべての人間が共有する、あるいは普遍的だと仮定される経験には関心がない。・・・

形相学的還元を始めるために、当該の現象をそれと関係があるものの異なった他の現象と比較する。この比較のプロセスは『想像における変更』という形相的技法として知られている。・・・

形相的還元を通して、特定の現象に属する意味のパターンやテーマを浮上させることが出来る。しかし、これらのテーマは理論的あるいは概念的な抽象ではない。・・・

形相的還元は概念分析ではない。・・・むしろ、ある現象のイコン的イメージ—深い意味の構造—を与えようと試みる。・・・形相的還元は世界を十分に分解された諸概念の体系へと単純化し、固定化し、縮約するものではない。むしろそれとは正反対に、世界の曖昧さ、縮約不能さ、偶然さ、不思議さ、そして究極の不確定さを現れるようにすることだ。」(eidetic reduction)

(4) 科学的現象学における修正

このように、科学的現象学では、哲学的現象学の要件を次のように修正している。まず、記述では、話者が自然的態度で捉えたものを詳述するという修正を加える。現象学的還元のところでも述べたように、研究者自身は自らの先入観や前提の影響を受けずに話者の話を聞けるかも知れないが、話者自身は自らの先入観や前提に基づいた自然的態度で諸現象を経験している。このように、すべての人々が現象学的還元を行い、事象が呈示されるままにそれを捉えているとは考えられないので、自然的態度をとっている話者の特殊な諸経験を詳しく具体的に記述するよりない。

次に、形相的還元によって経験の不変の側面を捉えるといっても、第一に各学問分野の視点から見た独自の側面を検討し、その最も不変的な意味（現象の本質）を追究するとされる。そして Sketch 論文ではイコン的イメージ、すなわち深い意味構造よりも、研究者の前提である各学問領域での科学的態度によって捉えられた概念的抽象が捉えられることになるだろう。逆に、Procedure 論文では、そもそも個々人の経験の不変的側面（個々人に呈示された現象の本質）は得られたとしても、人々の諸経験の普遍的不変（ある現象の普遍的本質）の追究は諦めて、特定の個人の経験の記述に徹することになるだろう。

以上のように、哲学的現象学では、哲学者自身が現象に直接的全体的に対峙することで、現象学的還元を実行しながらしかも形相学的還元も行える。しかし、人間科学では研究者が自身とは異なる話者という別の人間の意識に呈示された現象を自身の意識で捉えなければならない。そこで研究者は話者の経験を話者の意識に呈示されたままの姿で再現することが出来ないと言う問題が発生する。つまり話者自身に現象学的還元をさせることが出来ないのだ。また、更に、哲学的現象学では自由な想像的変更によって可能であった形相的還元が、むしろ状況に規定された個々の話者で異なる経験の記述に終わらざるを得なくなっている。このように、科学的現象学はフッサールの記述現象学に忠実であろうとしても、人間科学の研究対象そしてそのデータの性格からして記述現象学たり得ない。そして、結局は科学者による学問的態度の採用による実証主義の復活か、はたまた特定の視点に立って先入観を記述に織り交ぜた解釈への移行かしかあり得ないのではないか。

しかし、科学的現象学が記述現象学ではあり得なく、解釈的現象学でしかないとしても、個人が体験した生活世界についての質的データを分析する方法としては、有用な方法として多くの論者に用いられている。そこで、A.Giorgi の科学的現象学の方法を更に技法として展開している R.H.Hycner (1985) と C.Holroyd (2001) の技法を次に見てみよう。

V R.H.Hycner (1985) と C.Holroyd (2001) の現象学的分析の手順

現象学は方法や態度であって技法や教則本ではないと言われる。しかし、哲学的現象学に不慣れなものが、現象学的態度を修得することは極めて困難である。そのために、質的データを分析する人間科学の研究者にはある程度の標準的分析技法や手順を示すことが必要になってくる。こうした観点から、R.H.Hycner (1985) は次の15のステップを（また C.Holroyd (2001) は後で見るような六つの段階を）提示している。

ステップ1：インタビューテープの書写

音声言語を文字化すると共に、可能な限り言葉によらないあるいは言語以外のコミュニケーションを記入する。この場合、トランスクリプトの右側に大きな余白を残しておいて、ステップ4の概略的意味単位が記入できるようにしておく。

ステップ2：括弧入れと現象学的還元

インタビューの録音を聞き、トランスクリプトを読んでから、現象をその現前するままに全体的に把握する（ステップ3）のみに先立って、可能な限り、研究者自身の意味や解釈を一時停止して括弧に入れ、話者の独自の世界に入り込む作業（ステップ3）に備える。この際に、自身の既に有する前提・知識を括弧入れするだけでなく、話者の話の部分部分への反応も括弧入れしておく。また、括弧入れを完全に行うことは不可能だが、自覚している自身の前提や先入観を列挙して、別の研究者によるチェックや対話による発見（ステップ6）を受けることが望ましい。

ステップ3：全体の意味の読み取り

テープ全体を何度も聞き直し、またトランスクリプトを何回も読み直して、全体の意味（趣旨）を読み取る。この全体の意味は、特殊な意味単位やテーマ（ステップ8とステップ9）が浮上してくる時の文脈を与える。

ステップ4：概略的意味単位の記入

トランスクリプト（テキスト）の語、句、文、段落を厳密に調べそれらやトランスクリプト中の言葉によらないコミュニケーションの中で表現されている意味の本質に近づくための前提作業である、概略的意味単位への分割とその表現を行う。これは、話者の言葉をそのまま残しながらテキストを濃縮する作業である。

概略的意味単位とは先行するあるいは後続する意味単位からはっきり区別される一貫した意味 (unique and coherent meaning) を表現している、語、句、文、段落あるいは言語以外のコミュニケーション単位である。

概略的意味単位は、

- ① なるべくトランスクリプトに現れた話者の言葉で表現する。
- ② 本質的な単位か、状況的な単位か、はたまた筋に無関係な単位かといった研究上の問に関係づけて区切るのではなく、話者の意味の一貫性に基づいて区切る。
- ③ 区切るところが不明瞭な場合には、なるべく細かく区切って単位を設定し、後で文脈がより明瞭になった時点で、一纏まりにすべきことがはっきりすればより大きな意味単位に纏める方略を採用する。

ステップ5：研究上の問に関連した (relevant) 意味単位の記入

概略的な意味の諸単位に、研究上の問を投げかけ、それらが問に関連したものか否かを判別する。研究上の問と無関係な意味単位を省いて、レリヴァンスのある意味単位だけを記入する。この際、レリヴァンスは、話者の語り全体（トランスクリプト全体）を文脈や参照点として採用する場合と、各意味単位を含んだ語りの一部分（セグメント）を文脈や参照点として採用する場合では異なってくる。一部分を文脈と

する場合には、疑わしきを含めると言う基準を採用して残すか省くかを定める。そして、後で、より広い文脈の中でその現象の本質と無関係であることが分かれば、その時点で省く。

ステップ6：独立の判定者によるレリヴァントな意味単位の妥当性の検討

研究上の問に関連した意味単位の決定に際し、研究者が行った決定の妥当性を確かめるために、この方法の訓練を受けた別の研究者に同一の作業（ステップ1～5）を実行して貰い、当該研究者の判断が妥当か否かを検証する。もし重大な不一致があれば研究者委員会による裁定を受ける。

ステップ7：冗長性の除去

関連する意味単位のリストを検討し、明らかに余分な単位は除去する。その際に、文字通りの内容だけでなく、それが言及された回数やその言及のされ方（ノンバーバル・コミュニケーション）に依っても判断する。

ステップ8：研究上の問に関連する意味の諸単位のクラスタリング

関連する意味の諸単位が確定したら、再び現象学的還元の状態を採って現象に忠実たんとする。その上で、研究上の問に関連する意味の諸単位を結合するような、共通のテーマや本質があるかどうか見極める。この段階では研究者の判断やスキルが大きく関わってくるので、研究者の先入観が再び乗り出して来る危険が大きい。それをチェックするために、このステップ8を実行した後で、ステップ6と同じように独立の判定者による点検を行うべきである。

この段階の具体的手続きは、意味単位を一つずつ吟味して、その本質を決めていくことだ。最初の意味単位の本質がAだとすると、以下の諸意味単位がAか否かを順に決めていく。そして同じAとされたものを同一のクラスターAに纏める。次にAでないと言われた諸意味単位で最も前のものの本質を決定する。それがBだとすると、すべての意味単位がBか否かを判定し、BとされたものをクラスターBに纏める。この作業をすべての意味単位がいずれかのクラスターに含まれるまで繰り返す。ただし、同じ意味単位が別々のクラスターの同時に含まれることはあり得る。

ステップ9：テーマの決定

すべての意味クラスターを吟味して、これらの諸クラスターの本質を表現する一つ以上の中心的テーマがあるかどうかを判定する。ここでは、分析したテキストの部分（あるいはインタビュー全体）と意味の諸クラスターのゲシュタルトが扱われる。

ステップ10：個々の聞き取りの要約

個々のインタビューのトランスクリプトに戻って、データから引き出されたテーマを組み込んだインタビューの要約を書き上げる。これは個々の話者の経験という内的世界を再構成する作業である。

ステップ11：話者の所に戻っての点検

最初のインタビューの吟味が話者の経験の本質を正確にまた十分に捉えられているか否かを点検してもらいに話者の所に出向く。また必要に応じて二回目のインタビューを行う。

ステップ12：テーマの修正と要約

二回目のインタビューから得られた新しいデータについて、ステップ1からステップ10までの手続きを再び実行する。その後、すべてのデータを一つの全体として検討して、必要ならばテーマの修正や変更を行う。

ステップ13：すべての話者に当てはまる一般的テーマと個々の話者に独自のテーマとの識別

① すべて（あるいはほとんど）の話者に共通するテーマが存在するか否かを検討し、もし存在すれば、

- これを一般的テーマ (general theme) として一括する。また同時に、
- ② 単一の話者や少数の話者に特異なテーマも列記する。

ステップ14: テーマの文脈化

一般的テーマと独自のテーマが記された後で、これらのテーマを浮上させた文脈全体あるいは地平の中に、それらのテーマを戻してみる。こうして、その現象が文脈 (地平) の中で果たしている役割がはっきりとして、その現象の理解が進む。

ステップ15: 合成的要約

参加者達が体験した一般的世界を記述した合成的要約を書き上げ、併せて特異な世界についても列記する。

次に、C.Holroyd の現象学的研究方法の手順についてみてみよう。これは6段階の手順からなる。

第一段階: 生のデータの直観的/全体的な理解

この段階では、必要ならば繰り返しデータを読み、探究している現象を全体的にかつ直観的に理解する。その際に、すべての予見や判断を一旦括弧に入れる。

第二段階: 成分プロファイルの作成

この段階では各話者から得られた生のデータを要約する。まず、自然の意味単位を識別し、それらが提示するいくつかの経験の纏まり (中心的テーマ) に縮減し、各話者ごとの中心的諸テーマの組み合わせを表示する成分プロファイルを作成する。

① 自然の意味単位 (natural meaning units)

自然の意味単位とは話者達の経験の個々の側面を示す、自己限定的で、別々な表現の塊である。

② 中心的テーマ (central themes)

中心的テーマとは自然の諸意味単位を、それぞれ別個の経験を示すいくつかの文に縮減したものである。

③ 成分プロファイル (constituent profile)

成分プロファイルとは、各話者ごとに中心諸テーマを再構成したもので、これは描写的な意味陳述の繰り返しを含まない諸テーマのリストである。

第三段階: テーマ目録の作成

各話者から得られた成分プロファイルを用いて、「テーマ目録」 (thematic index) を構成する。このテーマ目録は浮上した主要テーマを目立たせる。

① 諸成分プロファイルの描写

中心的テーマの場合と同様に、繰り返される陳述やレリヴァンスのない陳述を取り除いて、それぞれの成分プロファイルを再構成する。

② レファレント (referent) の抜粋

レファレントは調査された経験の意味を強調する特殊な言葉のことである。成分プロファイルからレファレントを探し出し、それらを抜粋してリストをつくる。

③ テーマ目録

テーマ目録によって解釈可能なテーマを探し出すのに用いる、意味陳述やレファレントの繰り返しを含まない、一連のリストが作成される。テーマ目録には、単一の経験の意味に帰せられる成分プロファイルの陳述が含まれる。

第四段階：テーマ目録の検討

この段階では、レフェレント、中心的テーマ、そして成分プロフィールを比較して、解釈可能なテーマの集合を作り出す。ここでは、経験の意味を報告するデータを解説することに焦点が当てられる。

第五段階：詳細に書き直された記述の完成

解釈可能なテーマを用いて、研究している現象に帰せられる意味を厳密に解説する。

第六段階：詳細に書き直された記述の総合

この段階では、解釈可能なテーマを要約して、研究している現象についての話者達の経験を深く描写する。

このように、R.H.Hycner や C.Holroyd の現象学的研究方法の手順では本質学的に形相的構造を先験的に学問的観点からえぐり出すと言うことは一切行わず、経験的に記述の中から意味単位やテーマを自然と浮かび上がらせると言う方法をとっている（表1を参照のこと）。C.Holroyd は実際にこの方法を自身のコミュニティ・ビルディング・ワークショップの研究に適用し、これに関係した話者から自由回答法の聞き取りを行っている。そして、こうしたテキストの分析の中で、自然的態度による話者の経験の陳述から研究者の学問的態度による読みかえ＝解釈への転換がいつどのように行われたのかははっきり示されていない。インタビューでの聞き取り項目それ自体が、話者の経験の陳述を絞り込んだのか、それとも自発的な問題設定による話者の経験の発露をそのまま用いて、学問的視点からの本質探究を全く行わずに、記述によるテーマの自発的発現に任せたのかと言うことが分からない。もし後者であれば記述現象学的態度は守り得たであろうが、そこから得られる知見は自然的態度で話者達が捉えている常識的知識の整理要約以上のものではないだろう。また前者であれば、インタビューの方法をもっと自覚的に検討し、話者が話題それ自体を自発的に組み立てる質問方法を T.Wengraf (2001) の SQUIN のように確立する必要があるだろう。あるいは、逆に、記述現象学を放棄して、インタビューという対話の中で話者と研究者が話者の経験を話者の語りとして共に再構成していくことを自覚して、解釈的現象学の方法を採用するしかないだろう。

VI 科学的現象学は形相的科学たり得ているのか？

かつて、J.L.Heap & P.A.Roth (1973) は E.Tiryakian (1965), S.Bruyn (1966), J.Douglas (1970) らの自称現象学者の著作に現れた、E.Husserl の現象学に対する無理解を批判したことがある。彼らはその中で、特に、志向性、還元、現象、そして本質のとらえ方が隱喩的で、フッサールの概念から大きく逸脱していることを明らかにした。

志向について言えば、E.Tiryakian はそれを W.I.Thomas (1951) の注意と混同し、J.Douglas はそれを目的と等しいと考えた。志向（意識は常に何かについての意識である）は注意とは異なり、それに先立つ意識の本質的特徴である。これを理解しないと、現象学の認識論が主観主義と客観主義の両視点を超越していることが分からなくなる。また、志向は前述定的レベルの意味を持たない知覚、直接体験について言っているのであって、述定的判断（思考）レベルの目的と等置することは出来ない、というのだ。

還元について言えば、E.Tiryakian や J.Douglas は経験的領域での操作と誤解している。現象学的（形相的、心理学的、超越論的のすべての）還元は、先験的可能性の領域での志向対象や志向行為に関する操作で、自由な想像的変更によって意識の対象や行為を変更して、経験的世界内の対象や行為の現出に対して本質的なものを発見することだという。

現象について言えば、E.Tiryakian はフッサールの「もの自体へ」とデュルケムの「ものとしての社会的事実」とを混同するといった暴挙を犯し、J.Douglas は自分の理論的スタンスを現象学的還元と誤解しているという。フッサールの「もの自体へ」という格言は意識に直接与えられている現象に戻ることで、研究者が社会的行為を現象として捉えるには、研究者自身の前提や先入観のみならず、日常生活世界で自然的態度を抱いたままに行為している行為者たちの存在そのものをも括弧に入れなければ、いかなる意味でも現象学

的還元はなされなかったことになる、というのだ。

本質について言えば、S. Bruyn は第一次集団、社会制度、価値、社会などなどの社会現象についての概念についてその本質について論じると考えている。社会学が関心を持つ諸事実の定義的特性は、実在と考えられている世界内の現実的な諸対象についての事実的知識に基づいて演繹や帰納といった論理的操作を加えて経験的に得られるものである。これに対して、本質は直観的に捉えられる不変の性質であり、先験的可能性の領域の問題である。そもそも、フッサールのいう事実学は本質を捉えようとしているものではない、と言うのだ。

このように、事実学としての経験諸科学に、フッサールの現象学の基本概念、すなわち志向性、還元、現象、本質などを移植するいかなる試みも、その事実学と現象学の両者を歪曲することになるであろうと言う指摘は、現象学的社会学のみならず、現象学的心理学にも当てはまるだろう。もしそうした現象学的経験科学が存在するなら、それはフッサールのいう形相的科学しかあり得ないと言うのだ。

さて、Heap らは現象学的という旗印を僭称すると否とに拘わらず、フッサールの現象学の趣旨に近い社会学として、

タイプ I : W. I. Thomas, Cooley, Mead, Weber らの解釈的パラダイム、

タイプ II : Schutz, Berger & Luckman, Holzner らの形相的科学、

タイプ III : O' Neill, Smith, Cicourel らのリフレクソヴ社会学、そして

タイプ IV : H. Garfinkel, Pollner, Weder らのエスノメソドロジーを挙げている。

そしてこの中で、形相的科学と言えるのは、「自然的態度の構成的現象学」(Schutz, 1962:132) であり、同時代人らの生活世界の不変の形式的諸構造が先験的に明らかにされているというのだ。

また、Z. Bauman (1973) や J. Goldthorpe (1973) は Ethnomethodology が positivism にすぎないと論じている。そして、N. Islam (1983) に至っては、現象学的社会学は社会生活の主観的側面を効果的に扱う方法でも、社会分析に適した方法でもなく、現象学としてもまた社会学としても失敗していると言っている。

それでは、Giorgi や Hycner の方法論はフッサールのいう形相的科学と言えるのだろうか。彼らが研究参与者(被験者)たちの自然的態度をそのまま受け入れて、彼らへのインタビューのトランスクリプトをデータとして、それに自称「想像的変更による還元」を行って得られるものは「本質」とはほど遠いのではないか。Heap らが言うように、

「形相の探求は、その始まり、すなわち(研究参与者たちの自然的態度によって)類型化された生活世界によってすでに制限され、先入観によって歪曲されている。類型を超えて本質を探究することは、先験的知識が得られる保証のないままに、解釈的理解を放棄すると言う危険を冒すことになる」(pp. 361)

といえるだろう。Giorgi や Hycner は明らかに経験的科学、フッサールの言い方では事実学を行っており、こうした事実学の領域に現象学の方法を移植しようとしている。しかし、それは Schutz のように形相的科学を行ったわけではない。あくまでも調査参与者の自然的態度で捉えられた日常生活世界についての語りのテキストをデータとしている。そしてこの経験的領域に対して「操作としての還元」を行う。さらに「想像的変更」によって不変の本質を発見しようとしているのではなく、「比較に基づく分析的帰納」によって共通の属性を発見しているに過ぎないのではないか。要するに、彼らの言う現象学的還元は還元たり得ず、また彼らの謂う想像的変更は「経験的所与性の姿に直して、これを直観的に例示した」(Husserl, 1950:12; 訳書68頁) テキスト同士を比較し共通のテーマをえぐり出す分析的帰納を実行しているのであって、「想像上の所与性を例示」(想像的変更)して本質直観するものではないといえよう。

参考文献

Bauman, Z., 1973, "On the Philosophical Status of Ethnomethodology", Sociological Review, 21(1):5-23.

- Benner, P., (eds.) 1994, *Interpritive Phenomenology—Embodiment, Caring, and Ethics in Health and Illness*, Sage, London.
- Bruyn, S., 1966, *The Human Perspective in Sociology*. Prentice Hall, Inc., New Jersey.
- Crotty, M., 1996, *Phenomenology and Nursing Research*. Churchill Livingstone, Melbourne.
- , 2003, *The Foundations of Social Reseach*, Sage, London.
- Douglas, J., 1970, “Understanding everyday life” in J.Douglas (eds.) *Understanding Everyday Life* Aldine Publishing Company, Chicago.
- Dowling, M., 2007, “From Husserl to van Manen, A Review of Different Phenomenological Approaches” *International Journal of Nursing Studies*, 44:131-142.
- Gadamer, H.G., 1975, *Wahrheit und Methode Grundzüge einer pilosophischen Hermeneutik*, J.C.B. MOHR, Tübingen.
- Giorgi, A., 1970, *Duquensne Studies in Phenomenological Psychology: Volume I*, Duquesne University Press. Pittsburg, PA. 早坂泰次郎監訳「心理学の転換」勁草書房, 1985.
- , 1976, *Phenomenology and the Foundation of Psychology*, Duquesne University Press. Pittsburg, PA. 早坂泰次郎監訳「心理学の転換」草書房, 1985.
- , 1985, “Sketch of a Psychological Phenomenological Method”, in A.Giorgi (eds.) *Phenomenology and Psychological Research*, Duquesne University Press. Pittsburg, PA.
- , 1992, “Description versus Interpretation : Competing Alternative Strategies for Qualitative Research”, *Journal of Phenomenological Psychology*, 23(2):119-135
- , 1997, “The Theory, Practice, and Evaluation of the Phenomenological Method as a Qualitative Research Procedure”, *Journal of Phenomenological Psychology*, 28(2):236-260.
- , 1999, “A Phenomenological Perspective on Some Phenomenographic Results on Learning”, *Journal of Phenomenological Psychology*, 30(2):68-93.
- , 2000a, “The status of Husserlian phenomenology in caring research”, *Scandinavian Journal of Caring Science*, 14:3-10.
- , 2000b, “Concerning the application of phenomenology to caring research” *Scandinavian Journal of Caring Science*, 14:11-15.
- , 2002, “The Question of Validity in Qualitative Research”, *Journal of Phenomenological Psychology*, 33(1):1-18.
- , 2004, “A Way to Overcome the Methodological Vicissitudes Involved in Researching Subjectivity”, *Journal of Phenomenological Psychology*, 35(1):1-25.
- , 2006, “Difficulties Encountered in the Application of the Phenomenological Method in the Social Science”, *Análise Psicológica*, 30(4):353-361.
- Goldthrope, J., 1973, “Review Article: A Revolution in Sociology”, *Sociology*, 7:449-462.
- Gurwitsch, A., 1964, *The Field of Consciousness*, Duquesne University Press, Pittsburgh.
- Heap, J.L., & P.A.Roth, 1973, “On Phenomenological Sociology”, *ASR*, 38:354-307.
- Heidegger, M., 1962, *Being and Time*, Basil Blackwell, Oxford.
- Husserl, E., 1950, *Ideen—Zu einer reinen Phänomenologie und pänomenologischen Philosophie. Erstes Buch*, Martinus Nijhoff, Haag. 渡辺二郎訳 1976 「イデーノI」みすず書房。
- Hycner, R.H., 1985, “Some Guidelines for the Phenomenological Analysis of Interview Data”, *Human Studies*, 8:279-303.
- Islam, N., 1983, “Sociology, Phenomenology and Phenomenological Sociology”, *Sociological Bulletin*, 32(2): 134-452.
- Maggs-Rapport, F., 2000, “‘Best Reseach Practice’ : in Pursuit Methodological Rigour”, *Journal of Advanced Nursing*, 35(3):373-383.
- Mall, R.A., 1993, “Phenomenology—Essentialistic or Descriptive?”, *Husserl Studies*, 10:13-30.

- Merleau-Ponty, M., 1945, *Phénoménologie de la perception*, Editions Gallimard, Paris. 竹内・木田・宮本訳 1967, 1974 「知覚の現象学1・2」みすず書房。
- Schutz, A., 1962, *Collected Papers I The Problem of Social Reality*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht. 渡部・那須・西原訳 1983 「社会的現実の問題I」1985 「社会的現実の問題II」マルジュ社。
- , 1964, *Collected Papers II Studies in Social Theory*, Martinus Nijhoff, Hague. 渡部・那須・西原訳 1991 「社会理論の研究7」マルジュ社。
- , 1974, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt—Eine Einleitung in die verstehende Soziologie*, Wein, Springer-Verl., 佐藤嘉一訳 「社会的世界の意味構成」木鐸社。
- , 1975, *Collected Papers III Studies in Phenomenological Philosophy*, Martinus Nijhoff, Hague.
- Silverman, H., 1987, *Inscription: Between Phenomenology and Structuralism*. Routledge Kegan Paul, New York.
- Spiegelberg, H., 1982, *The Phenomenological Movement*, Martinus Nijhoff, Hage, 立松弘孝監訳 「現象学運動」世界書院
- Thomas, W.I., 1951, *Social Behavior and Personality*. Social Science Research Council, New York.
- Tiryakian, E., 1965, “Existential phenomenology and sociology” *ASR*, 30:674-688.
- Van Manen, M., 1990, *Researching Lived Experience—Human Science for an Action Sensitive Pedagogy*, State University of New York Press. London Ontario, Canada.
- , 2002, *Phenomenology Online*, <http://www.phenomenologyonline.com/Wengraf>, T., 2002, *Qualitative Research Interviewing*, Sage, Thousand Oaks, Cal.